

## イタリアの教育から学ぶ、教育の大切さ

児童教育学科 A.M.

今回のイタリアでの教育研修は、教師・保育者としての存在の在り方、そして、子どもにとって教育がどれほど大切であるかを学んだ。教師・保育者は子どもの未来のために存在し、子どもの成長にとっての最善を考え、教育・保育を行うことがその役割であると考えた。そして、科目をただ教えるだけでなく、子どもが自発的に学ぶことのできる環境づくりをすることが教師の行うべきことであると学んだ。今の日本の教育現場、特に幼稚園・保育所では「遊びを通して学ぶ」ということが多い。乳幼児期の遊びが子どもにとって大切であるという考えは、イタリアの教育と似ている。しかし、日本と決定的に違うのは、日本は「遊びの中に教育」があるが、イタリアの教育は「教育の中に遊び」があることである。そして、日本の小学校の教育課程は、教師1人が複数の子どもたちに科目を教え、子どもたちはテストのために暗記するという受動的な授業が多い。しかし、イタリアでは、教師は子どもたちを見守る環境の一部であり、子どもの興味を持ったことが追求できるように環境を整える。そして、教師に教えてもらい暗記をするのではなく、様々な教具を使って自らの頭で考え学ぶことのできる能動的で「思考力」のつく教育があったと考える。

レッジョ・エミリア幼児教育施設では子どもにとっての表現はコミュニケーションのツールであると学んだ。まだ言葉を使い上手く伝えることのできない子どもにとって遊びの中の表現活動は自分を他者に伝える大切な方法である。そして、そうした遊びを通して表現方法を学び、言葉という知識の源を学んでいく。表現力は知的・社会的・感情的な感覚能力を育む。この感覚能力は知識を総合的に学ぶうえで必要となってくる。例えば、知識の基礎となる言語能力、想像力などである。これらの知識は子どもの豊かな育ち、未来のために必要となってくる。

子どもの教育の重要性を学んだのはモンテッソーリ実践校での研修である。学校が静まり返り、子どもたちが集中し黙々と教具に取り組む姿に驚いた。子どもたちは皆、教師に強制されるでもなく自らが行うことを決め取り組んでいた。これは、子どもの「学びたい」という気持ちになる環境が整えられているからである。そして、その学びたいという意欲に応えることのできる整えられた環境があるからである。「整えられた環境」と言っても学びたい意欲が湧く環境だけでなく、教具や整理整頓がされた「美しい環境」も必要となってくる。そんな環境があれば子どもたちの意欲が湧く。校内の見学で見たのは、年齢に関係なく難易度の高い勉強をしていることである。4、5歳の子どもたちが英語や算数の勉強をしていたり、小学校低学年でも割り算の勉強をしていた。しかし、子どもたちは飽きることなく集中し、わからないことがあれば、自らの頭でその問題を解くための教具を考え、使用し取り組んでいる姿があった。豊富に揃えられ、学びに向かう子どもたちをサポートするのが教師であり、子どもの自発的な行動を待つ見守ることが、子どもの自立性の発達を促すと学

んだ。イタリアの教育を学んだことで、日本の教育、そして教師という職業について改めて考えることのできた研修となった。

